

尚絅女学院短大 ○草野篤子 元相模女大 横石多希子

目的 近年、家庭科教育についてその制度及び内容においてより望ましいあり方が求められている。それを採るてがかりとして、まだ学校での家庭科が具体的には始まっていない子供達を持つ母親が、家庭科の各諸領域をどの程度履習し、かつ娘、息子達に対しては、各々の領域をどの程度履習することが必要と考えているかを明らかにする。その際、母親の職業の有無、年齢、学歴、夫の年収、家族数、子供の性別と年齢、住居形態、結婚形態、母親の就労理由、家庭科の必修に対する態度等によって生じる差異についても分析する。

方法 1986年1月、香川県仙台市の公立小学校三年生の母親に、担任をうけて質問紙を配布、回収した。対象者数は189名で、回収率は100%である。

結果 (1)被服製作のすべての項目で、女子は「少しは必要」又は「かなり必要」が多いが、男子は「あまり必要ない」が多い。(2)被服選択については、「上手な買い方」については、男子も「かなり必要」があるが他の項目では、女子は必要で男子はあまり必要ないとなっている。(3)「身づくり」では、男女とも「少しは必要」が多い。(4)栄養では、男女とも少し又はかなり必要が多くなっているが、女子の方が割合が高い。(5)献立と調理は、男女共必要という傾向が強いが、「食物費」については女子が顕著である。(6)家族関係について、母親達は全くあるいはあまり履習していないが、子供達に対しては、「かなり必要」と「少しは必要」と考えている。(7)人間の性行動について、母親達は全く習っていない者が多いが、子供達は男女共習う必要があるとする。(8)消費者教育・家庭管理・住居・住宅設備について母親達は全く、又はあまり習っていないが、子供は男女共必要と考える。